

『俳優・諸芸／当利競』に見る寄席芸の演者と演目

今岡謙太郎

幕末から明治にかけての寄席には、落語や講談といった舌耕芸に加え手妻や写し絵といった諸芸や、義太夫をはじめとする音曲の芸人も数多く出演し、諸芸交流の拠点となっていた。近代以降の諸芸能の展開を考える際、この時期の寄席芸の上演実態、他ジャンルとの影響関係の解明は大きな課題といえよう。だが、特に新聞などのメディアが発達する明治十年以前については記録の少なさもあいまつて、後年の記憶を元にした記録、一枚摺などの出版物からその事情を探るしかなかったのが実状である。中でも時代相を率直に反映する浮世絵はその重要性が考慮されながら、絵画という性格上公開が難しく、なかなか資料として活用出来なかった。しかしここ数年の間で図録等の刊行に加えてウェブ上での閲覧を可能にした機関が増加し、徐々にではあるが従来扱えなかった絵画資料を舌耕芸・寄席芸の研究に役立てる環境が整いつつある。また一方、時代考証を基盤とする役者絵研究の進展は、他ジャンルの研究にも影響をおよぼしつつある。

こうした状況を鑑み、本稿では早稲田大学演劇博物館所蔵のシリーズ物の錦絵『俳優・諸芸／当利競』を取り上げ、内容の紹介を中心にその資料性について見ていきたい。役者絵・芝居絵として位置付けられる絵画資料が寄席芸・舌耕芸の研究においても有益な資料であることの一端を示せば幸いである。

「俳優・諸芸／当利競」について

シリーズの物の錦絵『俳優・諸芸／当利競』早稲田大学演劇博物館をはじめ、幾つかの研究機関での所蔵が判明している。題名に見えるように、このシリーズは歌舞伎役者の当たり役と、寄席で人気を博していた演者と演目を組み合わせて描いたものである。まず、概要について記しておく。版元は具足屋、絵師は豊原国周。確認出来た改印に「西四」「西十」等いずれも明治六年。この改印と明治六年九月に江戸お目見えした中村宗十郎を描く絵が二枚含まれ、同年改名した九代目団十郎について、「河原崎権之助」「河原崎三升」両方の名前が見られるところから、明治六年中、あるいは翌年早くにかけての刊行と考えられる。全般の体裁は、いずれも上段の駒絵内に寄席の看板に寄席芸の演者と演目、肩書きなどを描き、その演目の主要登場人物と思われる人名が役者似顔で描かれる。下段は歌舞伎役者の当たり役が描かれ、役者名、役名も付される。落語家の演目が記載された作は「俳優・落語／当たりくらべ」講師師と組み合わせた作は「俳優・舌師／当たり競」など表記や字遣いには異同が見られる。「目録」に当たる

一枚(0071245)【図版1】



図版1「俳優諸芸当競」目録

007-2457

には『俳優・諸芸ノ当利競 目録』とある。シリーズ全体の名称としてはこの表記に従う。現在、ウェブ上で画像公開を行っている機関では早稲田大学演劇博物館(1)、国会図書館(2)、東京都立中央図書館(3)、立命館大学アート・リサーチセンター(4)、山口県立萩美術館・浦上記念館(5)での所蔵が確認出来る。中で最も多数の所蔵が確認されたのは早稲田大学演劇博物館で、重複を除く二十八種がウェブ上で閲覧可能である。

「目録」に「通計三十六番」とあり、寄席芸の演者・演目が三十六種記載されているところからみて、三十六枚のシリーズとして企画されたと考えられるが、実際の刊行点数は未詳。現在まで三十五点の刊行が確認できた。以下、発行が確認出来た錦絵と、目録との異同について述べる。目録に記載がありながら、錦絵が確認できなかったのは講師師拍鱗(演目「不知火物語」)。逆に錦絵が確認出来て目録に見えない演者(演目)は桃川燕国の「百猫伝」が記される00712467の一点。目録記載の演者はジャンルによって書き分けられており、講談の演者・演目は立看板に、音曲と落語は寄席行燈の中に記載されている。更に寄席行燈は三段に分けられ、上段には義太夫、常磐津の太夫・三味線の名が記され、下二段は落語を中心とする、いわゆる色物席への出演者と思われる芸名が記される。これはおそらく当時の寄席興行の形態を踏まえての描き方かと思われる。また、行燈の下げピラには圓朝、燕枝、扇歌、柳橋の四人が記される。また、柳亭燕枝、豊竹和国太夫については二つの演目について別々に記載されており、演者総数は三十四人となる。

また、頭取姿の役者が広げた巻物の中に登場役者が一覧にして記載される。いずれも刊行時に活躍していた役者である。

確認できた錦絵の演者・演目等を一覧表にして掲げ、ついで該当する錦絵が未確認のものも含め、目録に記載された演者の順に添って演者・演目の概要を述べる。一覧表は演博の所蔵番号順に配列し、画題、記載演目名、演者、目録中で該当する演目名、目録錦絵中に見られる肩書き等、上段の駒絵内に描かれた役名と役者、改印、下段に描かれた役名と役者といった項目を設けた。演博以外の所蔵品については演博の所蔵が判明しないものについてのみ掲げる。なお、ウェブ上での閲覧という制約もあり、残念ながら一部の文字は判読出来なかった。特に改印は所蔵機関提供のデータをそのまま用いた場合もある。

「別表1」

落語家とその演目

まず落語家について抽出し、演者と演目の概要について記す。演目については目録に挙げられた名称「」にいれ、個別の演者名の上に付す。また該当の錦絵中に異なる場合は「」内に名称を付した。演者の代数は基本的に芸名の下に、といった略称で記し、代数不明の場合は「」で記す。

「お竹殺し」芝楽：三笑亭芝楽。天狗連の一つ中橋連から四代目可楽の門弟で本職になり、芝楽から延玉を名乗り後に三笑亭可楽を継ぐ。「清元延寿太夫」を得意にしたという。明治二十五年に引退。演目「お竹ころし」は長編人情噺と推されるが、内容は不明。

「長兵衛」「つゞき咄 長兵衛」麗柳：未詳。芸名は「橋々亭麗柳」と読めるが、諸資料に同名の芸人は確認できない。あるいは麗々亭柳橋の誤字か。演目「長兵衛」は幡随院長兵衛伝か。『只誠埃録』二百六巻に乾坤坊良齋の纏めた演目、いわゆる「良齋種」の

一つに長兵衛伝がみえる。

「三曲」八蝶：未詳。該当する錦絵では寄席行燈の中に「東京花 八丁堀」「やくし」とあり、下げピラは「団扇 松寿」「人気 八蝶」と読める。同時代の寄席芸人に同名の人物名は見当たらない。あるいは寄席自体を記したものが、八丁堀の薬師境内にあった宮松亭は「薬師の宮松」また単に「薬師」と通称された当時指折りの寄席。素浄瑠璃での義太夫興行に加え、操り浄瑠璃の興行も多くかかった。特に女義太夫の席としては第一等の存在。行燈内の記述はこの宮松のこととも考えられる。【図版2】

「皿やしき」「重扇雨夜菊の井」
都楽：亀家都楽 力。「写し絵」
の元祖と称された都楽 の名前を襲名した人物と思われる。明治八年刊行『諸芸人名録』では落語家上等之部に「亀家都楽」とあり、おそらく同一人。この前後の資料には真笑亭、隅田川など別の亭号で都楽を名乗っている例が見え、同一人と思われるが確定は困難。

演目の「皿屋敷」は、お菊の亡霊などの場面を写し絵で見せたものと考えられる。「其三筋縁深川」燕枝：柳亭（談州楼）燕枝。初代柳枝門下で伝枝から燕枝を名乗る。三遊派の圓朝に拮抗した柳派の大看板。若年時は芝居噺で売り出したが、明治初年からは素話に専念した点も圓朝と軌を一にする。自作の演目も数多い。演目は題名から見て「深川芸者殺し」か。深川芸者殺しの実説は初代船遊亭扇橋（初代柳枝の大師匠にあたる）が三日続きの演目に仕立てたと伝えられる（『続歌舞妓年代記』）。【図版3】

「和尚次郎」「お花・和尚次郎 / 深川日記」柳亭燕枝：これは初代柳枝の得意演目で、黙阿弥作、善悪両面兇手柏の題材となった作。二世三亭春馬作の合巻「仇桜恋白浪」（安政四年）の原作とも伝えられる（注「かくやいかにの記」）。「象ち」「善吉」「越路の雪」小燕枝：柳亭小燕枝。後の柳亭燕路。大正年間まで長寿を保ち地

噺の名手として知られた。演目は現行の講談「越後伝吉」と同一と思われる。

「松五郎記」「荻江松五郎伝」燕路：柳亭燕路。後の春風亭柳枝。燕枝門下から三代目柳枝を襲名し、明治期の大看板となった。「蔵前の大師匠」また大酒癖から「蔵前の大トラ」との渾名があった。演目は未詳。「荻江松五郎」の名は圓朝作「月謡荻江一節」を連想させ興味深いが関連は不明である。

「与三郎」「おとみ・与三郎 / 浮名横ぐし」志ん生：古今亭志ん生。初代志ん生門人、今輔 から明治初年に志ん生の二代目を襲名。大兵で俗に「お相撲志ん生」と言われた。



図版3「俳優落語あたりくらべ」
柳亭燕枝 目録 007-0324



図版2「俳優落語当り競」
目録 007-2465

演目は「切られ与三郎」。乾坤坊良斎の作で講釈師では文車、伯圓などが得意としたが、初代志ん生の演目としても有名。「与話情浮名横櫛」初演時には初代志ん生の演出が参照されたことはよく知られる。

「さくらざうし」「さくら宗紙」圓馬：三遊亭圓馬。初名市馬から圓朝門人となり圓馬を名乗る。一説には圓朝が看板を上げる際に天狗連から引き抜かれたともいう。人情噺の名手で、住所から「駒止の圓馬」と呼ばれた。演目は「佐倉宗五郎」。「佐倉義民伝」等の名で知られ、瀬川如臯作「東山桜莊子」の題材にもなった。

「お七」「お七・吉三ノ小堀の伝」龍玉：屋氣楼龍玉。立川金馬 門人金作から龍玉となる。長編人情噺を得意とし名手と称されたが大酒のため身を持ち崩した。演目「お七」は「八百屋お七の伝」（「小堀政談天人娘」）。八百屋お七を旗本騒動に仕組んだ作で河竹黙阿弥作「吉さま参由縁音信」の題材となった作。

「網打七五郎」「網模様」里う馬：土橋亭里う馬。登龍亭鱗蝶門人から二代目里う馬門下に入り三代目を継ぐ。演目の「網打七五郎」は講談でも多く演じられる、「小猿七之助」。河竹黙阿弥作「網模様燈籠菊桐」の題材としても知られる。

「天保すいこでん」「天保水滸伝」市丸：世界坊市丸。伝未詳ながら幕末～明治十年代までの資料に名が見える。演目「天保すいこでん」は上州の侠客国定忠次、大前田英五郎などを取り合わせた作。初代宝井琴凌の「馬方忠次」系統や松林伯圓の系統など幾つか系統がある。歌舞伎では三世河竹新七作「上州織侠客大編」に、新国劇では行友季風作「国定忠次」に脚色された。

「忠しんぐら」「芝居正本」水魚連：水魚連は幕府の木倉奉行だった江守（江森）安蔵が中心となった素人演芸の仲間。慶応末から活動していた。江守は東屋水魚、仮名垣魯文が鱈魚、豊原国周は鯛魚と名乗り声色を使った。佃屋白魚や翁家さん馬など本職も加わった素人玄人合同の一座だった模様。スポンサーは江守で、京都で三笑亭芝楽を名乗った原田熊次郎によれば落語、義太夫などの番組の後に影芝居で声色を遣い、最後に茶番で打ち出したという（『大阪朝日新聞 京都付録』大正二年一月九、十日の記事）。遊興仲間としてはかなり後まで続いたらしい。【図版4】

「半七」「音曲咄」志ん橋：船遊亭志ん橋。「神田のおばさん」（『古今落語家系統表』）の渾名があった船遊亭志ん橋と思われる。女性で、音曲を主に演じたものか。演目の「半七」は未詳。

物真似「藪のはなし」馬楽：蝶花楼馬楽。都々逸坊扇歌、三遊亭圓生の門人で歌生、後に柳橋 門下で柳女から二代目馬楽を継ぐ。滑稽に長じていたという。錦絵に記載された演目は「藪のはなし」と読めるが内容は不明。長編よりも一席物の滑稽話を得意にしたと思われる。

「お夏清十郎」「お夏・清十郎ノ夏の月」文治：桂文治。文治の長男で、八歳の時に由之助で初高座、桂文楽 から慶応二年に六代目を襲名。三代目馬生仕込みの芝居噺を



図版4「俳優落語当りくらべ」
水魚連 目録 007-2469

得意とし、明治期には圓朝、燕枝と並ぶ大立者の一人となった。演目の「お夏清十郎」は長編物と思われるが詳細は不明。

「巡礼仇討」圓朝：三遊亭圓朝。いわずと知れた明治を代表する落語家。橘家圓太郎の子で、圓生 門下で小圓太から安政二年に圓朝と改名。若年時は芝居噺を得意にしたが明治に入ってから素噺に専念し、名人と称された。「怪談牡丹灯籠」など創作も数多い。演目の「巡礼仇討」は後に「敵討札所の靈験」の題で全集に収められた作と同一と思われる。

「関所」「うかれふし」扇歌：都々一坊扇歌。扇橋 門人扇三郎から三代目扇歌を襲名。片足が悪かったが男前で音曲も三味線も上手だったという。錦絵では駒絵内の下げピラに「扇蔵」「松魚」の名が見える。扇蔵 は後に入船米蔵 となった人、松魚は後に五明楼松玉 となった扇橋 の門人か。目録に書かれた演目は「関所」と読めるが内容は不明。

「しきしま」「しき嶋譚」柳橋：麗々亭柳橋。灌川鯉かん 門下から柳橋 門に転じ、三代目柳橋を継ぐ。幕末を代表する落語家の一人で、技芸面では圓朝にも影響を与えた。柳橋の名を息子に譲り明治十一年柳叟、十六年には春錦亭柳桜となる。長編人情噺、怪談噺に長じ、「四谷怪談」「白子屋騒動」などを得意とした。演目の「しきしま」は「怪談敷島物語」。黙阿弥作「好色芝紀島物語」の原作にもなった。

講釈師とその演目

落語席出演者と思われる芸人が十九に及ぶのに対し、講釈師の記載は八人にとどまる。当時の講談界の盛況を考えると、単純に芸人数による問題とは考え難い。全くの推測だが落語席にはいわゆる素噺を得意とする落語家だけでなく音曲や写し絵といった、現在では「色物」と認識される芸種の人物も出演しており、これも同じ落語席出演者と位置付けたためではないかと思われる。ともあれ落語と同様に演者と演目の概要を述べる。

「小猿七之助」「扶桑・外邦ノ群書」伯圓：松林伯圓。落語の圓朝、歌舞伎の團十郎と並び称された講釈師。伊東潮花門下で花郷、東秀齋琴調 門下調林から松林亭伯圓の二代目を襲名。幕末期は得意にした白浪物から「泥棒伯圓」と称された。明治期には新聞講談、翻案物なども得意とした。「天保六花撰」など自作も多い。演目の「小猿七之助」は前記里う馬の演目と同じ。白浪物の一つ。錦絵の演目では「群書」とあるが、駒絵中に描かれるのは河原崎権之助による小猿七之助で目録と同じ演目。

「不知火物語」伯鱗：神田（木偶坊）伯鱗。神田伯山 門下の古老で、数々の無邪気な挿話を残す。演目は合巻「白縫譚」（柳下亭種員他、嘉永二年初編）を講釈化したものか。あるいはその原拠となった「黒田騒動」「天草騒動」とも考えられる。

「天保水滸伝」「勢力水滸伝」圓玉：松林圓玉。櫛屋の職人から伯圓 に入門、圓玉を名乗る。前職から「櫛屋圓玉」と呼ばれた。美音で端物読みの名手。演目「天保水滸伝」は初代琴凌が勢力民五郎、飯岡助五郎など下総の博徒同士の確執を題材にまとめたという演目。河竹黙阿弥作「群清滝鬘肩勢力」に脚色され、後に浪曲などで広く知られた。

「松前屋の説」「松前屋伝」南龍：田辺南龍。御家人出身で、南鶴 門下で南遊から二代目を襲名。修羅場を読む時の口癖「のんのんすいすい、すたすたのんのん」から「の

んのん南龍」と渾名された人気者。演目「松前屋の説」は大久保政談（「大久保武蔵鑑」）の一つ。商人松前屋五郎兵衛の危難を大久保彦左衛門、一心太助が救う物語。江戸時代から歌舞伎の題材となっている。

「鬼あざみ」「諸軍談」燕国：桃川燕国 力。明治八年『諸芸人名録』の軍談師之部上等に「東紺屋町 頭取 桃川燕国」と見える人物が。ただし燕国 は明治七年に桃川如燕と改名するまでに燕玉、燕林と短期間で改名を繰り返しているところから、何らかの混同がある可能性もある。演目「鬼あざみ」は「鬼薙（鬼坊主）清吉」で、実在の盗賊を題材にした白浪物。現在では他の人物と組み合わせ「文化白浪」等の題で演じられる。

「二刀伝」「諸軍談」伯山：神田伯山。初代伯山門下伯勇から明治三年に二代目となる。初代ゆずりの「天一坊」、また「伊達騒動」「宮本武蔵」「宋朝水滸伝」などを得意とした。明治二十七年には門人小伯山に三代目を譲り松鯉 と改名。芸界の古老として重きをなした。演目「二刀伝」は宮本武蔵伝。錦絵の演目には「諸軍談」とあるが、駒絵中の人物は中村翫雀の無三四（宮本武蔵）である。

「いのり」芦洲：小金井芦洲。初代田辺南龍門人龍子から初代芦洲門下となり、初代没後二代目を襲名。修羅場読みの名人といわれ「川中島合戦」「賤ヶ岳」「三国妖狐伝」などを得意とした。演目の「いのり」は駒絵内の「玉藻の前 半四郎」から見て得意演目「三国妖狐伝」の一節か。安政五年の一枚摺『出放題集三幅対』には「あたりはずさぬ 南龍のいのり」明治八年頃の『員較名物表』には「七不思議 三国伝来のふる狐は芦洲の折り」とある。

「於百の伝」「百猫伝」燕林：桃川燕林。伊東燕国 門弟国栄から二代目燕国を襲名。後燕玉、燕林と改名の後明治七年に桃川如燕 となる。松林伯圓 と並ぶ講談界の看板で、数多くの速記を残した。「於百の伝」は秋田騒動で有名な毒婦「娼妃のお百」で燕林の得意演目の一つ。初代柳枝の「和尚次郎」と組み合わせられて河竹黙阿弥作の歌舞伎「善悪両面兇手柏」に脚色された。

「百猫伝・嵯峨の夜桜」桃川燕国：先に触れたように、この一枚については目録に該当する記述がない。おそらく前項の「於百の伝」に対応するものと思われる。燕国の芸名は本来伊東姓だが、この二代目燕国は桃川と改めその後燕玉、燕林とめまぐるしく改名した後に桃川如燕となっている。燕国時代「猫燕国」と渾名されたところからみて。襲名の間に情報が錯綜し、燕国の名で出されたものか。駒絵内の役は「お柳の方 岩井半四郎」とあるが、この役名は通常加賀騒動に用いられる人名。「百猫伝」（「嵯峨の夜桜」）は佐賀鍋島藩と旧主龍造寺家との確執に化け猫が絡む作で、登場する側室はお豊の方とする場合が多い。この事情も情報の錯綜を推測させる。

音曲の芸人たち

義太夫、常磐津を表芸とする七人の演者は、目録では寄席行燈の上段にまとまって記されている。これは字面などの面で統一感を出すためと考えられるが、一方ではやはり出身系統の違いも背景にあつたと思われる。歌舞伎を浄瑠璃化した「狂言浄瑠璃」を売り物にした豊竹和国太夫や岸の家吾妻太夫も操り座や歌舞伎の劇場出勤経験者で、この点でも都々一坊扇歌や船遊亭志ん橋といった存在とは一線を画していた。該当の錦絵にいずれも

「俳優・音曲」とある点も、以上のような事情を示唆しているように思われる。義太夫の場合、落語家と同席せず素浄瑠璃のみの興行が多く、人形入りの本格的な上演もかなり見受けられる。岸沢式佐の場合も常磐津派との反目からいわばやむなく寄席へ出演したという事情があった。こうした人々を、一種特別扱いしての記し方かとの推測を記しておく。ともあれ、引き続き人名・演目名の概要を記す。

「一の谷三の切」「一の谷三冊目」竹本時太夫「時太夫・語助」：豊竹時太夫 力。初め三味線弾きで豊澤博助 から鶴澤清七 門下で鶴澤文駄といい、相応に評価も受けたが太夫に転向。竹本春太夫 門下時太夫となる。美声を嫉まれて水銀を飲まされたともいう。『義太夫年表 明治篇』等では豊竹性だが、野澤語助 の談（『東京の人形浄瑠璃』所収）では竹本姓。野沢語助は二代目で初名竹沢竜作。野沢吉兵衛 門下で吉五郎から語助を襲名。東京義太夫界の重鎮だった。演目は「一谷嫩軍記」三段目の通称「熊谷陣屋」。なお、画中の寄席行燈には「福よし」の字が見えるが、これは出演した寄席と思われる。

「伊賀越八冊目」鶴沢紋左衛門：後の竹本播磨太夫。竹沢団六 の子。江戸出身で上坂し鶴沢清六門下で亀太郎、亀鳳。江戸へ戻り花沢伊左衛門 門下で門左衛門（紋左衛門）から伊左衛門を襲名。弾き語りで評判を得るが他の太夫・三味線から苦情が出て、明治十二年播磨太夫を襲名。御霊文楽座へも出た。演目は「伊賀越道中双六」八段目、通称「岡崎」。

「おしづ礼三」「おしづ・礼三ノ藪鶯」豊竹和国太夫：豊竹和国太夫。幕末期には江戸の操り座でもそれなりの位置にいた模様だが、代数など不分明。豊竹靱太夫（古靱太夫 力）門下で小靱太夫だった時期があったらしい（倉田喜弘編『明治の演芸』第二巻）。その後和国太夫となり歌舞伎を浄瑠璃化した「狂言浄瑠璃」で人気を博す。後宮戸太夫と改名。幕末から明治初期の寄席では人気だった。「おしづ礼三」は河竹黙阿弥作「契情曾我廓龜鑑」（慶応三年一月初演）の大切、小町お静と礼三郎の雪中での愁嘆場を浄瑠璃化したもの。この曲は以後も伝わった。

「勸進帳」豊竹和国太夫：歌舞伎「勸進帳」を浄瑠璃化したもの。駒絵内には和国太夫の弾き語り姿が描かれる。下げピラの仲に豊太夫、文字太夫、（判読出来ず）太夫、八右衛門、仲五郎、文三の名前が記される。この内明治八年『諸芸人名録』義太夫節之部では「上等之部」に竹本文字太夫、鶴沢仲五郎、鶴沢八右衛門、鶴沢文蔵の名が見える。文字太夫は後の豊竹岡太夫、文三は鶴沢文蔵か。【図版5】

「天竺徳兵衛」「正本浄瑠璃 重扇菊木琴」岸家吾妻太夫：岸の家吾妻太夫。『諸芸人名録』では「岸沢之部」の上等に「岸沢吾妻太夫」。演目は「天竺徳兵衛」を引き抜きなど使い常磐津で演じたもの。三遊亭圓生『明治の寄席芸人』に門人で二代目吾妻太夫を継いだ岸沢仲太夫が「音菊天竺徳兵衛」の座頭が木琴を弾くところから見頭しまでを弾き語りであった



図版5「俳優弦声当りくらべ」
豊竹和国太夫 目録 100-2837)

とある。

「伊勢音頭」岸沢式佐：岸沢式佐。常磐津岸沢派の家元、後に岸沢古式部。明治十五年に常磐津派と和解するまで、岸沢系の太夫はかなりの頻度で寄席に出ていた。演目は「伊勢音頭恋寝刃」の「油屋」を常磐津で演じたもの。

「宗玄庵室」竹本綾瀨太夫：竹本綾瀨太夫。豊沢亀之助、鶴沢友次郎らに稽古を受け、明治元年上京して竹本相生太夫を名乗る。綾瀨太夫と改名後、明治十年大阪へ帰り活動するが十八年に再上京して後東京に居着く。「宗玄庵室」「日向島」などを得意とし、名人との称があつた。演目は「岩倉宗玄恋慕琴」（「菊池大友姻袖鑑」）の宗玄庵室。清玄桜姫である。なお、行燈に「相生改」下げピラには「相生太夫・庄五郎」が見える。相生太夫は後組太夫を名乗り、大阪では二代相生太夫で文楽座などに出勤。明治四十年には二代目綾瀨太夫となつた。庄五郎は野沢庄五郎。『諸芸人名録』では上等之部に名前が見える。

「お染久松」「お染久松 質店」竹本鞆太夫：豊竹鞆太夫。カ。目録では竹本姓だが、錦絵では豊竹。江戸で二代目鞆太夫を名乗つた名人の豊竹古鞆太夫の可能性もあるが、古鞆太夫は明治三年に帰阪している。東京に巡業した際に旧名の鞆太夫を名乗つたとも考えられるが、別人が鞆太夫を名乗つた可能性も高い。演目は「染模様妹背門松」の「質店」。

「当利競」の位置と特色

歌舞伎役者と寄席芸演者（演目）を組み合わせる描く錦絵は、早くは文政八年の国貞画『両国夕涼み』の五枚続（6）が有名であろう。これは人気役者（七代目市川團十郎、五代目岩井半四郎、三代目坂東三津五郎、三代目尾上菊五郎）の夕涼み姿を描いた作で、背景に両国風景が描かれた版と、この風景を削り、代わりに三笑亭可楽、可上の落としばなしが記される版との二種がある。後者に収められた落し噺の演目は小咄とも言つべき短もので、この時期の落語家の実態を伝えるものといえよう。文政〳天保頃と考証される短冊型の役者絵に小咄を添えた『芝居絵落語噺貼込帳』（仮題）のような出版物も確認できる（7）

その後、幕末期にかけて落語界では長編人情噺、講談界では世話講談が流行するようになる。そうした演目を伝え、その主要登場人物を見立の形で描くシリーズが表れる。そうした出版の早い例に慶応三年の『はなしの花盛りの大よせ』がある。これは麗々亭柳橋の「四谷怪談」、三遊亭圓朝「皿屋敷胡蝶奇談」（菊模様皿山奇談）、土橋亭里馬「白浪五人男」（雲霧仁左衛門）、柳家（左楽「新撰かさね物語」、三笑亭可楽「おはな栄三郎 寿々川日記」（鈴川源十郎）の五点が確認され（8）、いずれも得意演目がピラの中に書かれている。作中の主要登場人物が河原崎権十郎役者似顔で描かれる点、「当利競」の先蹤をなすといえようか。版元は平新、絵師はいずれも国周である。また、純然たる錦絵とはいえないが、『嘶軍談揮分寿古六』（慶応四年正月）（9）はコマ内に落語家・講釈師の演者と演目を記し、主要登場人物を役者似顔（落語家の演目）と武者絵（講釈師の演目）で描く。役者似顔は国周、武者絵は芳幾画。「山々亭有人案」とあり、落語家・講釈師各十五人の演者と演目を取り上げられている。趣向としては同系統上に位置付けられよう。その背景には落語界における長編物の定着に加えて釈界における世話物の流行と定着

があつたと思われる。同時期の黙阿弥作品の多くがこうした演目を題材にしていることはいうまでもないだろう。また、少し範囲を広げて考えると、「豊国漫画図絵」のシリーズも共通する面を持つている。周知の如くこのシリーズは歌舞伎、小説などで有名な登場人物（主に盗賊）を役者似顔で描いたものだが、その中に見える日本左衛門や相模小僧三之助は講談「東海白浪」、雲霧仁左衛門やおさらば小僧伝次は「享保白浪」で知られた人物である。「当利競」は、一面ではこうした系譜上に位置するものといえる。

本作の特色は更に一步進んで講談や音曲といった寄席芸演者を範囲に含め、また演者の得意ジャンルなどの情報を豊富に収めているところにある。そしてそのいちいちが寄席芸、舌耕芸研究の再貴重な情報であるといえよう。

舌耕芸研究の視点からはまず第一に幕末期の長編演目が判明する点が有難い。速記術普及以前の演目にどの様なものがあつたのかを知る、あるいは演目の成立年代を考証する手がかりになるのである。例えば圓朝の「巡礼仇討ち」は全集所収の「敵討札所の靈験」と同一かと推察される。この作は既知の諸資料によつて自作としても早い段階で草されたとされるが、「当利競」でその補足が出来、かつ明治六年段階では既に売り物となつていたとの事情が判明する。一方、屋気楼龍玉の「お七の伝」では駒絵内のピラに「小堀の伝」と記されているところから、「小堀政談」「天人娘」と通称される演目とほぼ同内容であるとの推測が成り立つ。内容未詳とせざるを得なかつた演目もあるが、「当利競」の場合、題名に加えて駒絵内に作中人物が描かれており、同定する手がかりが残されている。更によれば、舌耕芸の演目を考える場合、同内容でも題名が全く異なるもの、逆に類似した題名ながら、内容的には全く異なるものの処置という壁に当たるのだが、登場人物名また扮装などからどの様な性格の人物かが判明する点も有益である。舌耕芸研究の進展につれ、こうした情報の重要性はより高まる。また襲名など、個人の業績を考証する伝記的資料としても有益といえる。改印、歌舞伎の演目などによつて刊年が確定出来る芝居絵の特性が舌耕芸研究にも役立つのである。

一方、興行史を含めた寄席芸研究の面からは、何よりも当時の興行実態、また当時の「気分」を知る資料として貴重である。新聞などのメディアが整わない明治初期は、資料的な暗黒期ともいえる。その中で同時代性に富む錦絵は当時の気分を生き生きと伝える存在といえよう。明治六年という転換の時期、寄席において何がどのように演じられていたのか。例えば幕末の遊興気分を色濃く残す「水魚連」の一枚があると同時に柳亭燕枝の肩書きに「今様はなし」と見えるなど、時代相を知る手がかりとなる。また、寄席芸の人気演目と歌舞伎役者の当たり役を組み合わせるといふ企画自体、当時における寄席の位置を示すものとも捉えられ、演劇史・芸能史における寄席芸の位置を考える手がかりともなる。

この「当利競」のような、寄席芸の演目・演者を紹介する錦絵シリーズは以後も幾つか刊行された。翌明治七年から出た「講談一席話」シリーズ（二〇）は「追加」も含めてほぼ五〇枚にも及ぶ大部なものである。版元は同じく具足屋、絵師は松雪齋銀光。当時の講釈師の演目と、その登場人物を役者見立で描く点は「当利競」と同趣向だが、一枚一役で描かれ、「転々堂鈍鈍」なる人物名で登場人物の解説が付けられる。その一枚一枚に講釈師の名が入っている点、登場人物の解説が備わる点、やはり「当利競」同様、舌耕芸の上演実態を知るに大いに貴重である。少し下つて明治十四年には「俳優・落語／見立三十六歌撰」が出た（二一）。これは落語家を役者に見立てて、落語家の経歴と役者の見立絵を組み

合わせたシリーズで、。絵師は守川周重。「発行人 福田熊次郎」と見え、時代の急激な
移り変わりを感じさせる。落語家の履歴また芸風などを知るに絶好の資料といえよう。

以上、『俳優・諸芸ノ当利競』の内容紹介を中心に、その資料性について若干の考察を
試みた。このシリーズが何よりも役者絵である点を考えれば、本来は下段の役者や上演演
目と総合して考える必要がある。また同時代の役者絵の刊行状況、劇壇状況など、今後
考えに含めねばならない点はあまりにも多い。しかしこれらは今後の課題として、今回は
ここでひとまず筆をおきたい。

注

- (1) 演劇情報総合データベース。 <http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/index.html>
- (2) 貴重書画像データベース。 http://rarebook.ndl.go.jp/pre/serve/pre_com_menu.jsp
- (3) 貴重資料画像データベース。 <http://metro.tokyo.opac.jp/ml/pic/>
- (4) 浮世絵検索閲覧システム。 <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/db/arcnshikie/default.htm>
- (5) 収蔵作品検索システム。 <http://www.hum.pref.yamaguchi.jp/>
- (6) 図録『浮世絵に見る落語』（二〇〇一年、煙草と塩の博物館）所収。浮世絵に見る落語の流れ全体については、同図録の解説を参照。
- (7) 武藤禎夫編『嘶本大系』十九卷（昭和五十四年十二月十日、東京堂刊）に所収。
- (8) 前掲演劇博物館演劇情報総合データベースでウェブ閲覧が可能。
- (9) 国立劇場伝統芸能情報館蔵。図録『没後百年 三遊亭円朝とその時代』（2001年早稲田大学演劇博物館）に図版所収。
- (10) 前掲国立国会図書館「貴重書画像データベース」でウェブが閲覧可能。
- (11) 『人名演落語全集』月報に吉田章一氏所蔵品の図版と解題が備わる。前掲『没後百年 三遊亭円朝とその時代』に二点所収。

* 演者・演目の考証についての参考資料は枚挙にいとまなく、一々は記さないが、就中落語については諸芸懇話会・大阪芸能懇話会編著『古今東西落語家事典』（平凡社）山本進校注『古今落語家系統表』（国立劇場調査資料課）に、講談については吉沢英明『講談師招集』、『講談明治編年史』（私家版）、菊池真一編『講談資料集成』（和泉書院）に多大な学益を受けたことを付記します。